

# やりたいプロジェクトを生徒が自由に企画。 教員は信じ委ね、「まずやってみる」力を育む



## 統廃合の危機回避のため 魅力的な学校づくりを推進

瀬戸内海の大崎上島にある大崎海星高校は、2014年に県の高校統廃合の基準により、募集停止の危機にあった。2年間の猶予期間でその危機から脱するため、当時の大林秀則校長が、町長と共に学校の魅力化に取り組み、数々の施策を実施した。塾がほとんどない島でも生徒の学びを保障する、地域おこし協力隊による公営塾「神峰学舎」の設立。地域資源を活用しながら自らの興味で課題研究を行う総合的な探究の時間「大崎上島学（以下、上島学）」の充実。そして、全国からの生徒募集、いわゆる島留学だ。「今までに北海道から鹿児島まで、さまざまな県から入学者が来ています。総探を始め、生徒たちが自由にやりたい学びをプロジェクト化させて、地域で活動しています。何かをやりたい生徒たちが全国から集まり、地元出身の生徒たちも島留学生からの刺激を受けて相乗効果が出ています」（前田秀幸校長）

## 自由だから本気度が上がり 責任を伴い真剣に取り組む

全国募集の1期生が入学した2017年に赴任し、そのクラスの担任となったのが兼田侑也先生だった。その年の全国募集の説明会に際し、「学校の魅力を一番知っているのは生徒たち。だから生徒に発信させてみよう」と、生徒たちに東京や大阪での説明会で発表してもらった。翌年から、生徒を県外に連れて行くなら部活動という枠がよいということになり、学校を広報する部活を立ち上げた。

「そのときに、学校の魅力を配達する役割だから部を『みりよくゆうびん局』という名前にしよう」と、生徒たちが決めました。大林校長時代からの自由に任せる風土が引き継がれているので、全国募集の説明会以外でも生徒たちが企画して地元向けの説明会や学校見学ツアー、SNSでの発信など活発に活動しています」（兼田先生）

その活動はすべて生徒の主体によるものだ。みりよくゆうびん局だ

けでなく、総探の「上島学」での地域活動なども、企画から地域への依頼、課題解決の活動の進行まで、すべてを生徒に委ねている。さらに、総探や部活の枠でもなく、生徒が自分のやりたい課題に自由に取り組み、イベントやワークショップ、農業体験などを企画し、地域の人々と交流するプロジェクトが、先生方が把握しきれないほどに存在するという。一人がいくつものプロジェクトを掛け持ちすることも珍しくない。

活動を基に総合型選抜で進学する生徒もいるが、専門学校や就職など進路は多様。入試目的で活動をしているわけではない。生徒たちは



前田秀幸校長（右上）、大崎海星高校魅力化プロジェクト担当でみりよくゆうびん局顧問の兼田侑也先生（左上）、同・勇修平先生（右下）

大崎海星高校（広島・県立）



「旅する權伝馬」という、大崎上島から宮島まで向かう学校行事に生徒が参加し、みりよくゆうびん局がSNSで発信。



(写真右)生徒事例の藤後めぐさんが運営した「海星マルシェ」。ジビエカレーを作るプロジェクトなど、仲間の活動と地元の人をつなげるサポートと、広報活動を行った。(写真左)中島陽菜さんが実践した「広島空港キャンプ」。空港と大崎上島の魅力を伝えるイベントを友人と企画し、広島空港プロボーザル大会で最優秀賞をとり実現した。



### 多数の活動を「やってみた」生徒たち



いろいろな経験を通じて、自分への気づきを得た  
藤後めぐさん(3年生)

本校を取り上げたテレビ番組で、先輩たちがキラキラして見えて、地域活動にも興味があり、大阪から来ました。でも、うまくいかないことが多くて悩んだ時期もあります。プレゼンを頼まれたりしてもやりたくなくて、2年生のときに大阪に1週間帰ったんです。そのとき、自分は地域じゃなくて、人と何かをすることが好きなんだと気づきました。いろいろなプロジェクトを経験して、格段に相手のことを考えるようになりました。あるイベントで、地域魅力化コーディネーターの方々のプレゼンを目の当たりにしたときに、「私は誰に向かってプレゼンしていたのだろう」と。対象をちゃんと考える広報を学びたいと真剣に考えるようになりました。内定している大学で、すべてのものに価値を見出し、独自の発想を実現できる人間になれるよう学び続けたいです。



最短距離より回り道することに価値がある  
中島陽菜さん(2年生)

最近では「広島空港キャンプ」と「O7(オーセブン)サミット」という学生の集まりを企画・実践しました。「空港キャンプ」は広島空港が生徒向けに主催するプロボーザルで最優秀賞をいただきました。自分たちが「空港でお泊まりしてみたい」という気持ちから、空港と大崎上島の魅力を伝えられるように、キャンプ形式のイベントを考え、実践しました。「O7サミット」は、自分が若者の社会参画に興味があり、人が話しやすい場をつくることに興味をもった友人と一緒に立ち上げた企画。大崎上島にある学校や地域の人が集って「島の交流の場を増やす」をテーマに語り合いました。企画を立てるまでに、友人と何度も語り合い、お互いを知る時間が貴重な体験でした。価値観が違って尊重し合いとことん話す、最短距離よりも回り道をしたことに価値があったと感じています。

### ■学校データ

1919年創立 / 生徒数97名(男子43名、女子54名)、全日制課程普通科。少子化により統廃合の危機に瀕した際、高校魅力化プロジェクトを立ち上げ、全国から生徒募集を開始。多様なプロジェクト活動が盛んで、地域と一体となって、生徒の学びや生活を支えている。

活動自体が目的で、やりたいからやっているだけなのだ。そして、教員は生徒を信じて任せている。  
「生徒が失敗しないように教員が手をかけると、生徒の本気度が下がります。やりたいことを自由にやるには責任が伴います。だから彼らも真剣に取り組み、自由だからと規範から逸脱するようなことはしません。プレゼン資料も一から生徒が作るため、拙い部分はありますが、大人が作るものよりも、思いが伝わっているように感じます」(兼田先生)  
教員の力や学校の名前が必要なきときは、生徒から声をかけてくる。  
「総探で地域の大人との交流が多いこともあり、うちの生徒たちは大人の巻き込み方がうまいのです」(勇修先生)

活動を通して自分を知り、自己肯定感が高まっていこうとした自分たち主体の自由な活動を通じて、生徒たちはどう変わっていくのだろう。  
「人に頼れるようになった」「人から頼られるようになった」「自分の強みがわかったので、人のプロジェクトにも関われる」「好きなものを好きと言える自信がついた」などの声があがっています。自己肯定感がすごく高まっています」(勇先生)  
「やってみたら案外できるということがわかるのだと思います。失敗しても誰も怒りませんし、挑戦する力がついていきますね」(兼田先生)  
実は、みりよくゆうびん局の発端となった全国募集の初めての説明

会で、生徒たちは緊張のあまり発表をうまくできない経験をした。しかし、発表上手な他校の生徒から刺激を受けて、翌年はダンボールでポストを作って目立てしてみたり、人気校の説明会に来た人を出待ちしてティッシュ配布をしたりと自分たちでできる精一杯の工夫を施して、他校の生徒に「すごい」と言わしめた。  
「失敗しても教員が口出しせず、信頼して待てばよいことを、生徒たちから学びました」(兼田先生)  
任された環境で自由に日々挑戦できるという、余白を手に入れた生徒たち。一人ではできない活動は友人や大人とつながったり、失敗を恐れずに挑戦し続けたらという、自分だけの時間の使い方、新たな自分を発見していくようだ。